

いきいき 行田人

自ら切り開いた書で、

自身初の個展を開催

金子

昌司さん（80歳・富士見町）

今月は、昨年の市制施行61周年・文化の日、合併50周年記念式典で文化功労表彰を受賞し、金子東園という雅号で人生初の個展を開催した金子昌司さんを紹介いたします。

もともと筆で文字を書くことが好きだった金子さんは、小学校の教師となった18歳のころ、趣味として書道教室に通うようになりました。本業である教師を続けながら、本格的に書の道を歩もうと決心したのは昭和32年のころ。地元の書家である渥美大童さんなどから指導を受け、その後、日本を代表する書家である松井如流さんや、その弟子である三田清白さんを師として書に取り組みました。「私の書道人生で一番の転機は、目標としていた三田先生が亡くなってしまったことです。先生がいなくなったら後は途方に暮れました」と振り返る金子さん。ほかの門下生が別の師匠に付く中、書一筋という環境ではなかったため、特に師匠を求めず一人で書を学んで



いこうと決心したのです。しかし、教師をやりながら自分らしい書を切り開いていくことは、体力的にも精神的にも負担が掛かり、心が折れそうになった時もあったそうです。それでも、兄弟子や先輩からアドバイスをもらったり、「自分らしい書とはどのようなものなのか」を常に自問自答したりと、悩みながら毎日基礎練習を積み重ね、多くの展覧会に出品する作品を創り続けるなど、一歩一歩前に進んでいきました。そして、「継続は力なり」という言葉のとおり、その努力は実を結び、自分で書を研究して8年の月日が経過した昭和54年から3年連続で埼玉県展特選賞を受賞。その後も数々の賞を受賞しました。

教師を退職後、各地域公民館の書道クラブや市内外の小・中学生を対象にした書き初めの指導など書の活動を続ける中、産業文化会館から企画展の話がありました。個展の開催に最初は「力不足と時間がない中で、満足のかいく作品ができるのか」と悩んだそうです。それでも自分で道を切り開いた経験を生かし、80歳を記念した「金子東園書作展」を開催。最新の作品約50点を展示し、多くの来場者から称賛の声をいただき、大盛況だったそうです。「私なんて相撲でいえば、十面にもいっていませんよ」と謙虚に話す金子さん。「体力と気力が続く限り書を書き、90歳までにもう一度個展を開きたい」と穏やかに語ってくれました。

私の作品

俳句

佐間 須永 節子
地震八日無常の雪に母捜す

本丸 関 常子
ひっそりと大樹の下の冬すみれ

忍 伊藤 英子
憂きことを乗り越えつつも木瓜芽吹き

忍 岡田 修
箸措いて耳そばだてる初音かな

谷郷 富山 由喜
普段着の卒業式やはればれと

佐間 根岸 克美
物忘れしても息災よもぎ餅

桜町 大塚 保子
夢追ひし明日と繋ぐ木の芽かな

向町 茂木 咲子
春萌える忘れた球根顔を出し

下忍 阿部 義之
春昼の猫のあくびをもちのけり

荒木 国島 初江
亡き夫に一人墓参の春彼岸

◎皆さんの作品を募集しています。
◎俳句は毎月5日までにはがき・封書で広報広聴課へご応募ください。

荒木 蛭間しげ子
三月や未曾有の被害夢の間に

城南 町田ツギ子
沈丁花香りただよふ今日あした

富士見町 森 節子
この苦み笑ってゆるせるふきのとう

矢場 鈴木かずの
幸不幸混ぜて届くや春の風

持田 田子 敏枝
曇りなき瞳に映る内裏雛

(木島 斗川 監修)



『早春』(油絵)
西依 暎子 (桜町)